

### 三、賢者

魔法というものは、すべてがすべて摩訶不思議なものというワケではない。

自然現象を誇張し、ある一点に力をかける。

それによつて空が飛べたり、炎が起こせたりするのだ。

万物と対話し、それによつて自然の力を増幅し、引き出す。

それが魔の神髄である。

しかし、その万物との対話と真つ向から相容れない魔もある。

その一つが、死者を扱う魔の力、ネクロマンサーである。

死人を動かす、魂をとらえ、そして死者を作り出す。

生まれてから徐々に死へと向かつてゆく生命の営みを断ち切り、魔の力で無理矢理にも命を制御する、それがネクロマンサーの極意なのだ。

しかしそのためには、生物の隅々まで知っている必要がある、その応用は死人だけではなく、生きている者に対しても効果を発揮する。

治癒でもないのにケガを治したりできるのは、そういうことであるのだ。

魔の中でも非常に特殊であり、自然の理と常に戦わなければならない術が、ネクロマンサーの術であった。したがって、この術を邪道と見なす魔法使いも多かったと、雛子は文献で読んだことがあった。

そしてもつとも血生臭い過程を経て、会得しなければならない術であることも……。  
道理で腕が飛んでも冷静だったわけだと、雛子は納得した。

同時に、どうやってネクロマンサーの術を身につけたのか、雛子は聞くのが怖かった。天音ほどの術者ともなれば、人間の生死に、かなり関わっているはずだからだ。少なくともそうでなければ、ネクロマンサーの術など、手に入れらようはずもない。

何人殺したことがあるんだろう？

率直な疑問が、雛子の頭の中をグルグルと回り続けていた。

「わたしのことを、恐れていますか？」

「え？」

「それとも、軽蔑していますか？」

「天音……」

「もう少し時間がほしかったです」

「時間？」

「少しずつ、少しずつわたしの力を知って欲しかった……そうすれば、わたしのことを理解しても

らえるって……」

「天音がネクロマンサーだからと言って、わたしは軽蔑したりはしない」

雛子はそれを証明するかののように、天音を抱きしめた。それは雛子にとって命をかけた意思表示だった。丸腰でネクロマンサーに自分の身体を密着させることは、自分の肉体を、ネクロマンサーに捧げるようなもの。

しかしそれが雛子が天音を軽蔑していないという、意思表示なのだ。

「神宮司さん……」

「ただ、恐れていないかという、それは嘘になる。なぜなら、ネクロマンサーの術を会得するには、いくつもの命を犠牲にしなければならぬことを、わたしは知っている」

「はい……」

天音は否定しなかった。

「しかもわたしは、自分の欲望のためにそれを実行してきました」

「それほどまでに強い欲望だった……」

天音の欲望とは、何だったのだろうか。

「でも過去形と言うことは、その欲望は適った？」

「はい、適いました。ですから、わたしにはもう魔は必要ないって……そう思っているのです」

「でも、適っても、孤独も不幸もなくならなかった……?」

「はい……なくなりませんでした」

天音はうつむいた。

「ネクロマンサーなら、なおさらかも知れない」

雛子はそうつぶやくと、自分たちがいた公園の方へ視線を向けた。

自分たちを狙った殺気は、もう何処にも感じられなかった。

「……………」

雛子を狙ったものか？

天音を狙ったものか？

どちらなのか核心はなかったが、一発目は確実に天音を狙ったものだ。

「命を狙われるような心当たりは、ある？」

雛子は念のために聞いてみた。

あるというのが、雛子の予想だった。ネクロマンサーとして、恨みを買っている可能性があるか

らだ。

「わたし自身に心当たりはありません……………」

しかし天音は声を震わせてそう答えた。

「そう……………じゃああれは何だったのだろう……………」

真つ先に思い浮かんだのが、やすらの顔だった。

飛び道具を使うところも共通している。

「待つて！」

雛子は携帯電話を取り出すと、やすらに電話をかけた。

コールが四〇秒以上も続いてやつとやすらが出た。

『あーもう、ちよつと！ 今いい所なんだから邪魔しないでよ！』

どうやらゲームか何かに夢中になっているところらしい。

『ハイ光人、バトンタッチ』

そういうとやすらの声が遠のき、代わりに光人が出る。

『ま、いつもの通りだ。で、どうしたんだ？』

光人声はため息混じりだった。

「やすらは、ずっとそこにいた？」

『ああ、帰ってくるなり、晩飯も食わずにずっとゲームで遊んでるよ』

「そう……」

『何かあったのか？』

「あった。戻ってきたら、話す」

『危険なことじゃないだろうな？』

「まだわからない」

『声が緊張しているぞ、雛子』

「う……………」

『変なことに首を突っ込むなよ』

「だ、大丈夫……………あとでそっちに行つて話すから」

雛子はこれ以上追及されるのを恐れて、電話を切った。

「わたしの心当たりは、外れたみたいだ」

「そうですか……………この街には、何かあるのですか、神宮司さん？」

「……………いろいろあるけれど、どうかな」

「？」

「この街にある『いろいろ』は、天音には関係ないことのはず」

「そうなのですか……………」

「とにかく戻ろう。外にいと、危険」

雛子は天音の腕を引つ張ると、すたすたと歩き出した。

「は、はい……………」

天音もつられて歩き出す。

不思議と、雛子に恐怖心はなかった。

\* \* \*

「面目ございません」

月明かりを避けた暗がりの中で、男は深く頭を下げた。

「何か問題でも起きたのか？」

ルイーゼは月明かりに照らされながら、男に背を向け、窓の外を眺めた。

ここはフォラント家の屋敷、ルイーゼの執務室だった。

大きな窓からは、広い庭が見え、それは真つ白に雪をかぶっていた。

「邪魔が入りまして……」

男はそう言うと、天音を射殺しようとした時の光景を思い出していた。

一発で仕留めるつもりだった。

本来なら天音が独りでいるところを狙いたかったのだが、一緒に居た少女はいつこうに離れる気がなかった。ただ、天音さえ始末してしまえば、目撃者は高校生一人。市の圧力でどうとでもなるという判断もあった。

一発目は一緒に居た少女——雛子——が天音を突き飛ばしたことによって、腕を貫くのみで終わった。

一発で仕留めるつもりであったため二射目は少し遅れた。

それが失敗の原因でもあった。

まさかもう一人までもが魔の使い手だとは、男は予想していなかったのだ。

プロテクション フロム ノーマル ミサイル

「Protection from Normal Missile か……」

事の次第を聞いたルイーゼは、やれやれとため息をついた。

「まさか冷泉天音の存在をもう嗅ぎつけておったとは……厄介じゃのう」

「次は魔力のかかった弾を用意いたします」

「それが良いじゃろうな」

「それにしても、あの少女はいつたい……」

「この街に住んでおる魔法使いじゃ。とはいえ、まだ賢者のレベルには達しておらぬ。いずれは達すると思うがの。名を神宮司雛子といってな、これまた妾の頭痛の種じゃ」

「といたしますと……?」

「高校生のクセに、場数を踏んでおる」

「実戦経験がある、ということですか?」

「そうじゃ。この街の天使の秘密に気付きおつてな……この街に封印されておる天使を全部解き放ちおつたのじゃ。その時に、何度か魔の戦いを経験しておる」

「瑠璃火様の件でございまか。あれは本当に驚くべき事件でした。おかげで、パワーバランスがややこしいことになっています」

「本人達にその自覚はないがのう……まったく、迷惑きわまりない。大人しく封印されていれば良かったものを」

「しかし天使であるのなら、いずれは我が法の者に与くみすることでしょう。現に瑠璃火様、水帆様、水翼様はルイーゼ様の元におられますし、やすら様にはもとのからの使命がごさいます。あとは天野光様が来てくだされば、すべては丸く収まりましょう」

「どうかのう？」

「？」

「その天野光人がノーと言えば、瑠璃火たちも我らの元を去るじゃろう。それくらい危うい関係じゃ」

「ではなおさら光人様の確保を急がなければ……」

「そうしたいところじゃが、肝心の天野光人が勢力争いに関心がない。今は打てる布石を打ち続けるしかないのじゃ」

「天使としての自覚を持ち始めれば、きっと我らと合流してくれるでしょう」

「……………だとよいがの」

窓際に立っていたルイーゼは眉をしかめながらも振り返り、椅子に座ると、暗がりにいる男に視線を向けた。

「神宮司雛子の力はたいしたことはないが、彼奴あやつは頭と勘が良い」

「ハードルが上がりましたな……」

「しかし神宮司雛子を殺すことはまかりならん。彼奴もいずれは賢者として開花するじゃろうが、それはその時のことであつて、今、我らが仕留めなければならぬのは、冷泉天音だけじゃ」

「承知いたしております」

「そしてこれはお主の使命でもあるのじゃ。新しい賢者とお主と、どちらが優れておるのか……他の賢者達は見守つておる」

「は……」

「妾は最大限の助力はするが、直接手を貸したり、人を足すことはせぬ。自身の力で、冷泉天音を殺すのじゃ」

「かしこまりました」

男は深々と頭を下げると、暗闇に消えようとした。

「助力はいらぬのか？」

ルイーゼがその後ろ姿に声をかける。

「ご心配なく。確実に、仕留めて見せます」

「期待しておるぞよ……」

ルイーゼは何か言いたそうだったが、言葉を飲み込み、男を送り出した。

ルイーゼに助力を求めるも、求めないも、それは男の自由であり、それらを含めて、彼の力量

なのである。

「思慮が足りぬぞ……ルドルフよ……」

もう誰もいなくなった暗がりに向かって、ルイーゼはそうつぶやくのだった。

\* \* \*

天音と雛子はなるべく人通りの多い場所を選んで、鈴鳴屋まで戻ってきた。

「ただいま、凜！」

鈴鳴屋の入り口を開けると、しかし出迎えたのは凜ではなく、彩であった。

「おかえり〜天音〜くんふふふふふ〜」

しかも酔っ払いの彩であった。

「あ、彩先生!! ダメ!!」

天音はあわてて彩の前に立ちほだかり、自分の後ろにいる雛子に彩の姿を見せまいとする。

「あんらあ、お友達い?」

しかしそんな天音のことなどお構いなしに、にゅつと天音の肩から首を出して、雛子に挨拶をするのだった。

「妖狐?」

割と冷静な雛子の反応。

「あんらあ、わかるの?」

「解るも何も、みたままだけれど」

「はれ?」

「彩先生、人間になり忘れてます」

天音は頭を抱えると、

「あははー、すっかり忘れてたわ〜〜」

当の彩はまったく気にしていない様子だった。

「んまー、のみ仲間がほしかつたのよ〜〜〜はい、入って入って、万引き女」

そしてぐいつと雛子の腕を彩が引つ張る。

「グサ!」

雛子の身体が硬直した。

「凜から聞いたのですね、彩先生……」

「んふふ〜〜そう〜〜聞いちゃった〜〜」

彩は鼻歌を歌いながら、鈴鳴屋の階段を上っていく。

細い腕なのに、雛子はまったく抵抗できなかった。

コタツのあるあの居間——本来ならばリビングと呼ばれるであろう畳の部屋——に通されると、

そこにはすでに酔いつぶれて寝ている凜の姿があった。おそらく彩と飲み比べを強要されたか、勢いに任せて飲んでしまったか……。

「凜、そんなところで寝てたら、風邪ひくわ」

天音は慌てて毛布を引っ張り出してくると、凜にかけてやった。

「風邪で鈴鳴屋が休みつても面白いわね〜」

彩は力力カカツと笑って、ぐいーっとまだコップに残っていたお酒を飲み干す。

「まー、すわってすわって」

そして、まだ何が何だか混乱してポーツと突っ立っている雛子の前に、ずずいと座布団を差し出した。

「何飲むー？ ビール、日本酒、焼酎、ワイン……なんでもあるわよお？ まー、でもこの店にあるのは安物ばかりだけどねえ」

ウワバミはケタケタ笑いながらも、グラスを取り出して雛子の返事も聞かずにビールを注ぎ始めていた。

「天音はー、ワインかなー」

「あの、わたしは……」

「神様が酌してやってるのに、飲めないっての？」

「う……」

「神様？」

そこでやつと雛子が口を開いた。

「そうよー、神様よー。チンケだけどね」

雛子の知っている神様というと、それは一つしか知らない。いわゆるキリスト教の神様だ。

「む……」

いまいちどう反応すればいいのか、雛子は困った。

「で、何のむ？」

「え……」

「何飲むつてきてんのよ——！」

彩は雛子の頭を両手でつかむと、ぐらぐらと揺らした。

「あわわわ……」

「ごめんなさい、神宮司さん、彩先生をとめることはわたしにもできなくて……」

「むう……お酒など飲んだことない」

「あんらまあ、それは人生損してるわよお、万引き女あ」

「ぐっ……」

雛子はこみ上げる怒りをグッとこらえて、彩からグラスを受け取った。

「じゃー、天音に友達ができた記念〜」

その雛子のグラスに彩は自分のグラスを傾けた。

グラスとグラスのふれあうキレイな音が、この居間に響く。

「さすが、妖怪の村から来たお店……」

雛子はちびりちびりとビールをやりつつも、畳に寝そべっている凜、そして目の前で幸せそうに酒を飲む彩を見つめた。

「類は友を呼ぶって所かしらね？」

彩はそんなことを言う。

「天音は妖怪に囲まれて、魔の勉強をしたの？」

それはそれで、何もない状態よりは勉強しやすいと雛子は思った。

「それがねー、悔しいことにぜんぶ独学なのよ」

彩が口をとがらせる。

「あたしたち妖怪と天音が合流したのは、すでに天音が魔を会得したあとだったわ」

そもそも妖怪の村は、湖の底に結界を張って作ったものだ。

その結界を壊したのは、天音である。

「独学で……あそこまでの術を……」

「ま、もともとそういう素質があつたってことなんだろうけどねえ」

「別にそんなことは……」

天音が恐縮する。

「で、万引き女」

「む。わたしには神宮司雛子という名前がある」

雛子は負けじと彩を見返した。

「名前なんて何でもいいのよ。万引き女であることが解ればさー」

「むむ」

「で、あんたさ」

「何？」

「この街のこと、何処まで知ってる？」

「え？」

「どーも、いい気がしないのよねえ。なんかこー、騙されてるって言うか、畏にはまってるって言うか、そういう臭いしかしてこないのよ」

彩はポリポリと頭をかきながら、何となく窓の外を見た。

「何のことを言っているのか、わたしによくわからない」

雛子は率直な感想を返した。

「あつそ」

彩は肩すかしを食らった。この神宮司雛子は魔法使いのくせに、この街の秘密とか根幹について

はまだ気付いていないらしい。

「彩先生、でもさっきわたしたち、襲われたんです」

天音は破れた左腕の袖を彩に見せた。

「んあ？なに、レイプでもされそうになった？」

「そ、そうじゃないです……！」

「命を、狙われた」

天音の代わりに、雛子が低い声でそう彩に告げた。

「あら、穏やかじゃないわね……」

それからしばし沈黙が続く。

彩も、天音も、そして雛子も、ただ黙ってうつむいていた。

いや、彩だけは違った。窓から外を眺めていた。

そこから見えるのは、パサージュの通りだ。

ガラス張りの屋根が見え、その下に、パサージュに行く人たちの姿が見える。

人通りはだいぶ少なくなっており、勤め先帰りとおぼしき人が、ぽつぽつと歩いていた。

「こりゃあ、変なクジひいちゃったかしらね〜」

彩はぐいつと安酒を飲み干すと、苦笑した。

「変なクジ？」

「この鈴鳴屋の物件を見つけてきたのは、あたしなのよ」

彩は苦笑しながら、雛子の方に向き直った。

「凜がどうしても人間の街に店を出したいって言い出してねえ」

東京の量販店で修行をして、店長にまで上り詰めた。

貯めたお金は三〇〇万。

彩がお布施だの何だのを集めて、三〇〇万。

天音の別荘にあった骨董品を売って、二〇〇万。

何処に店を出すかいろいろ悩んでいたところに、彩の悪友が訪ねてきたのだった。平安時代からの腐れ縁。あの頃の彩は悪女として朝廷を牛耳るほどの存在だった。その時の悪友が、今ではこの汐碕で不動産業を営んでいたのである。

どんな汚い手を使ったのかは解らないが、聞けば汐碕では割と老舗の不動産屋として通っているらしい。

店を出すにちょうど良い物件があるからと、保証金も家賃も格安で提案してきたのである。

「あんときゃー、酒に目がくらんでねー……」

彩はまたポリポリと頭をかく。

「彩先生は、いつも酒に目がくらんでる気がしますけど……」

天音がため息をつく。

「あははー」

しかし彩はまったく悪びれる様子 wasn't.

「んで、ま、この鈴鳴屋がこの街に開店したわけだけど、つて聞いてる、万引き女？」

雛子はすでに頭が大混乱である。

「平安時代？ 朝廷を牛耳る？」

そもそもそんな時代から生きているなどと言われたところで、信じられるわけがない。

「あんら、魔法使いのクセに、意外と頭が固いわねえ……」

「いくらなんでも、飛躍しすぎている」

「まー、あたしのことなんかどうでもいいわよ。あたしが気にしているのは、この街には何か秘密

でもあるのかってこと」

「秘密……」

秘密はある。

それは、天使のことだ。

その秘密に、雛子はどつぷりと関わっている。

「あるけれど、でも……」

その天使の秘密と、この鈴鳴屋や天音、そしてこの彩と呼ばれる妖狐が関係あるとは、とても思えなかった。

「この街の秘密に、あなたたちに何ら共通することも、関係することも無いと思う」

「その秘密は、あたしらに知られるとまずいのかしら？」

彩の表情はいつの間にか、真顔だった。酔いは、何処に行ってしまったのだろうか？

「秘密と言っても……人が聞いたら信じてもらえない程度のお伽噺のようなもの」

「ふくくん」

「だいたい、平安時代から生きているなら、どうしてこの街のことを知らない？」

「存在も知ってるし、いつから人がいたかも知ってるけど、この街に秘密があるなんて知りもしなかつたわ？」

「むう」

「この地は平安時代にもあつたし、その時から空に浮いていたし、あたしの知る限りじゃ二千年以上前から浮いてたわね」

「二千年……」

「人が住むようになったのは、一四〇〇年くらい前からかねえ。橘たちばなって言う、まー名前は日本語だけど、西方から来て天皇に取り入った一族がいたのよ。すでに滅亡していた橘家になりすまして、この汐碕の地を拝領したのは知ってるわ」

「つまり橘家は……日本人じゃない、ということ？」

「そうね、日本人じゃないわね、元は」

「渡来人？ 中国とか韓国からとか」

「いんや、もつともつと西」

「ええ!？」

それより西に行ってしまうと、そもそもモンゴロイドではなくなってしまう。

「ま、魔が使える連中なのは確かよ」

「だから宙に浮いているこの汐碇を拝領できた？」

「そ、飛べないところには来られないからねえ」

「でも少なくともあなたは来られた？」

「そうね」

「ふむ」

「まーでもそのあとのことは、あたしはよく知らないのよ。あ、いや、そうだ思い出した、一人だけ人が住んでたんだっけ」

「え？」

「そうそうそうそう、そうだったそうだった」

一度思い出せば、それに関係することも辛づる式のように思い出してゆく。彩の中で、記憶の断片がぱたぱたとつながっていった。

「そうよ、橘家が来る前、この地には一人だけ女が住んでたわ」

「女……」

「物腰の柔らかい優しい女だったんだけど、とにかく頭が良かったのを憶えてるわね」

「話したことがある?」

「フフ、だって考えてもごらん、万引き女」

「む!」

「いつこうに自分のことを名前で読んでくれない彩に、雛子は憤りを隠せない。」

「空を飛べないのは人間だけよ?」

「だが彩はお構いなしだ。」

「人間だけ? その人は人間なのに、汐碕にいることが変ということ?」

「違うわよ。空を飛べる妖怪なんて腐るほどいるのに、この地には誰も住み着いてなかったのよ! 女は言つてたわね、なるべくなら住んで欲しくないって」

「つまり、その女が妖怪の侵入を拒んでいた?」

「そ。なかなかうまいやり方だね、とんち勝負をして勝てたら住んでもイイって話だったのよ」

「なるほど……」

「色んな妖怪が挑戦してたけど、誰も勝てなかったわね。あたしも一度だけ挑戦したことがあるけど、勝てなかったわ。ありや、ただ者じゃないわね」

「その後、どうなったの?」

「橘家が来てから、逃げるようにどっかに行ったわね」

「うーむ……それは解せない」

「なんで？」

「そこまでして守っていたのなら、人間が来ても守り通すような……」

「はん、人間がよく言うわよ」

「え？」

「とんち勝負をして、負けたら土地を諦めますなんていう契約が、人間相手に通じると思う？」

「あ……」

「そんなのが通用するのは妖怪だけ。人間なら、その女を殺して力尽くで土地を奪うことぐらい

すると思うけど？」

「………確かに、人はそう言うものだと思う」

「もつとも、あの女とこの浮いている汐碇との関係は、解らずじまいだけだね」

「名前は？」

「ん？」

「その女の名前は、聞いていないの？」

「もしそれが天使ならば、雛子はその名前を知っているはずである。」

「今でも憶えてるわよ」

「誰？」

「トワノカグツチ」

しかしそれは聞いたことのない名前だった。雛子は残念そうに、視線を落とした。

「カグツチは日本神話で言うなら、炎の神様ですね」

そこへずつと黙って聞いていた天音が、ふと口を挟んだ。

「トワとは、永久……つまり、絶えぬ炎の神といたところでしょうか……」

「ああ……」

雛子は納得した。

「なによ、心当たりありそうじゃない？」

彩が楽しそうに雛子の見つめた。

「その人は……いや、人じゃないけれど、今でもいる。この世界のどこかに」

「へー」

「今の名前は、おきな熾永、熾永豊と言う」

「ふーん、聞いたことのない名前ね」

「熾おきは、燃えさかる炎を表す。熾烈しれつの熾。そして、永ながは永遠」

もつとも「豊」がないが……しかしそれだけで充分であろう。時代時代で名前を変えているだけに過ぎない。

「で、そいつは結局なんなのさ？この街の秘密と関係はある？」

「ある」

雛子は確信を持って首を縦に振った。

「彼女はこの地上に舞い降り、何らかの理由で天へ帰れなくなった天使」

そして、天野光人の実母である。

「なぐるほどねえ、天使だったのかい。そりゃ妖怪どもが束になっても勝てなかつたわけさね」

「この街には、天使の伝説が多く残る。人々は伝説でしかないと思っっているけれど……」

「現実だった？」

「そう」

なにせ、雛子は毎日天使に囲まれて過ごしているのだから。

「けれど」

「けれど？」

「天使のことに天音の命が狙われていることに、何の関係があるのかわたしには解らない」

「そうねえ、確かに天使と関係ないわよねえ、天音？」

「そ、そうですね……わたしは天使と契約を交わしたことはありませんし……」

「だから、この街の秘密と鈴鳴屋は関係ないと思う」

「ふん……ということには」

「？」

「他にも秘密があるってことよね？」

彩はあごに手をやると、フムと考えた。

「あ、そうか……」

雛子もどうしてそれに気付かなかつたんだろうと、手をポンと打つ。

「そもそも天使がいるような街なのだから……他に抱えているものがあってもおかしくはない、と  
（ううん）」

「そう、その通りね。さすが万引き女、頭いいわね」

「その呼び方をいい加減、やめて欲しい」

「クス、わかつたわよ、魔法使い」

「う……それはそれで、なんだか恥ずかしい」

「何よ、贅沢ねえ」

「そ、そう言うワケでは……」

「ま、どちらにせよ、こんな危険な街に天音を置いてはおけないわね」

「あ……」

天音と雛子はお互い目を見合わせた。

「そ、そう……それが賢明だと……わたしも思う」

雛子は少し寂しそうに、そう答えた。

「神宮司さん……」

天音も寂しそうだ。

「何恋人同士みたいに見つめ合ってるのよ？ひよつとしてみようセックスしたの？」

「ぶっ！」

「あ、彩センチ……な、な、な……」

二人が一気に顔を真っ赤にした。

「まだ会って一日しか経ってない……」

「ええ!?じ、神宮司さん、そ、そういう問題なのですか？」

「いーじゃない、女同士でもさー。魔法使いならチンコの二つや二つ何とかなりそうだし」

「ゴク……そ、そんな魔法が……」

「あ、ありません！」

天音が慌てて否定すると、雛子と彩の間に割って入った。

「じゃー生やしてあげよつかー。どっちが受け？それとも両方ともつけとく？」

「………下品」

「そ、そうですよ、彩先生、いくら酔ってるからって常識というモノがあります！」

「まっ、天音の口から常識ですって！」

彩がオホホと口に手を当てて、天音を流し目で見た。

「な、なんですか？」

自分はネクロマンサーという常識外の人間かも知れないけれど、シモネタを人前で話すほど常識な人間じゃないと天音は思った。

「えー、だって毎晩陸とズツコンバッコ……」

「きゃ———!!! なんてこと言うんですか!!!!」

「うるさ……」

「びっくりした」

「はあはあはあはあ……」

「陸と毎晩ズツコンバッコやつてるのよー」

しかし、そんな天音の最大限の叫び声で怯む彩ではなかったのだった。

「よっぽど天音の方が常識知らずよねー」

「ああああ……ひ、ひどいです」

「陸？」

「天音の兄よ」

「ええ？ それって！」

雛子が興味心身で上半身を乗り出す。

「そうそう、近親相姦。こんなウブな顔してやることはヤツてるんだから、隅に置けないわよね」  
「彩先生、ひどいです。そんなこと、言う必要ないじゃないですか」

「……………」

雛子はどう返していいのか解らなかつた。ただ一つ言えることは、魔術のみならず、性経験も天音の方が豊富だと言うことだ。しかも相手は血のつながった兄らしい。雛子はムズムズとした煮え切らない嫉妬心がわき上がった。魔法の嫉妬とは違う、何とも言えない自分が立ち後れている気持ちと、こんな小さな子が処女じゃないといういやらしさと、しかも相手は近親者で、さらに毎晩とすることは色んなプレイをしてるのかとか、まーとにかく色んな想像や思いが雛子の中でグルグルと巡ってしまっているのだ。

魔法だけでなく、すべてにおいて、天音は雛子の先を行っている、そんな風に雛子は感じていた。

「じ、神宮司さん、酔っ払いの戯言たわごとですから、気にしないでくださいね？」

天音は必至に否定する言葉を述べる。

「顔真っ赤にして、視線も合わせられないようじゃ、ホントですって言うてるよーなもんだと思うけどお？」

だがどう見ても、彩の言ってることの方が説得力があった。

「はうー！」

「本当なんだ……………」

「忘れてください……ホントに……忘れてください……」

天音は蚊の鳴く様な声で、雛子に懇願した。天音の雛子の袖をつかむ手が、プルプルと震えている。

「大丈夫、好きになった人がたまたま血のつながった兄だっただけだと思う」

「神宮司さん……」

「ケッ」

彩はこのつまらない神宮司のピリオドの打ち方が気に入らないようだった。

それからは、他愛もない会話が続いた。

天音の兄の話。その兄は地元の村で妖怪のためのレストランをはじめ、妖怪たちに人間の文化を教えていることなどを、雛子は知った。

雛子は雛子で、自分が体験したこの街での不思議な出来事を二人に話した。

天使が本当にいること。

実は天使と同じ学校に通い、天使と一緒に生徒会の仕事を手伝っていること。

まだ天使達は人間として生活していた時期が長く、天使としての自覚が中途半端なこと。それでもそのうちの一人——やすら——は、特殊な立場にいること。

「なかなか面白い街ね」

彩は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「色んな刺激があつて、飽きない」

「天音が狙われていなければ、この学校にでも通わせるのに、ね、天音？」

彩が天音に視線を向けると、そこにはすでにコタツに上半身を預けて寝息を立てている天音の姿があつた。

「そういえば、酒はあんまり強くないんだつたわね」

彩はポリポリと頭をかく。

「その点、魔法使いは強いわね」

「そ、そうかな……」

すでに何杯飲んだかも、雛子は憶えていない。

「何故天音が狙われているのか、それはあたしの方でも調べるわ」

「え……」

「この街は、天音にはいい街だと思ふしね」

「いい街……」

「天音とは何を話したのかしら？」

「まだそんなには……ただネクロマンサーだというのは、解つた」

「そう、ネクロマンサーなのよ。その理由も聞いた？」

「いえ……」

「フフ、兄のためなのよ」

「え？あの、レストランをしているという？」

「そ。天音の家族はね、事故に遭ってね、谷底に落つこちたのよね」

「……………」

「身体がまだ小さかった天音だけが奇跡的に助かった」

「それじゃあ……………」

「そう、兄のことが好きだったのね。兄を生き返らせることだけを考えて、生きてきた。それが、冷泉天音なのよ」

「す、すごい……………信じられないくらいに……………すごい!!」

「そうね、魔法使いなら、天音の成し遂げたことがどれほどのことか解るでしょうね……………でも、あたしから言わせれば、その術は少し未熟だったのよ」

「え？」

「完全に魔の力だけじゃ、兄を生き返らせるには至らなかつたわ」

「じゃ、じゃあどうやって……………」

「天音は東洋の力に目を向けたわ。焦つたのね。一刻も早く、兄を生き返らせたかった」

「ええ!!」

「いろいろ試したようだけれど、最終的に天音が見いだした答えは陰陽師だったようね」

「陰陽道……」

「アレに式神というものがあるのよ」

「式神……」

「姿形や仕組みは人間とは違うけれども、魔術よりも遙かに低コストで命を作り出すことができるわね」

「なるほど……」

「天音はそこに、魔の研究で手に入れた生命の知識を総動員したのよ」

「つまり、人間と同じ仕組みの式神を作った？」

「そう。そうして、自分の分身をつくって陸の魂を取り戻しに、妖怪の村に入ったのよ」

「充分すごいとわたしは思う」

「そうね、すごいわね。ただ、中途半端は中途半端なのよねえ」

「？」

「ま、兄に優しすぎたのがいけないのかも知れないけど」

「なんのこと？」

「普通、式神には魂はないわ。あるのは命だけ」

「ふむふむ」

「だから、目的を達成すると式神つてのは消滅するんだけど、天音にとって不幸なことに、自分

の分身と兄は愛し合っちゃうのよねー、これが」

「それに何の問題が？」

「で、この兄つてのも問題でねー、神主の息子なんだけど、そこそこ魔の力が強かったのか、まー今となつては何が原因なのかわかんないんだけど、魂が生まれちゃったのよ、その式神の」

「そ、そんなこと……あり得るのかな……魂を作り出すなんて」

そんなことは神様じゃなければできないんじゃないだろうか？ 光人達でさえ、不可能なのではないだろうか？

「フフフ、あなたたちは誰しも魂を生み出す能力を持っているじゃない」

「えっ!？」

「だって、子を産んだら、その子は魂のある人間でしょ？ あたしたち妖怪や動物はそう言うワケにはいかないわ」

「あ、そうか」

「式神の魂がどうして生まれたのかは解らないけれど、あり得ないわけじゃないってあたしは思ってるわ」

「な、なるほど……」

「そうして生まれた魂を、天音は陸と一緒に此方こなたに引き上げた」

「つまり、天音は二人になつてしまったってこと？」

「まーそうなるわね。見た目は違うけど、そうねー、三年くらい前の天音って感じかしらねえ」  
「夢みたいな話だ……」

雛子は天音の寝姿を、まじまじと見つめた。そして、そつとその頭を撫でる。

温かくて、ふわふわした感触が、雛子の手のひらに伝わる。

「大丈夫よ、目の前にいる天音は、オリジナルの方よ」

「もう一人は……?」

「村で兄と一緒によろしくやってるわ」

天音が「孤独から解放されなかった」とつぶやいた理由を、雛子はここで理解した。

そして天音の叶えなかった欲望というものが何であったかも。

「やはり、魔とは不幸しか呼ばないのだろうか……」

「人間にとつては、あるいはそうなのかもね、フッフ」

彩は目を細めて、そんなことを言う。

「で、でも天音はその兄とエッチはできているみたいだけど」

「フフ、最初はね。天音も嬉しかったみたいだけど……」

しかしそのそばには、天音の分身——夕奈ゆいな——も一緒だ。そして兄の心は夕奈を向いている。

この状況を天音はどう受け止めれば良いのか解らなかつた。

確かに、確かに兄は『妹』を好いている。それには違いない。

だがそれは自分ではない。しかし、それは自分でもある。

しかもこの状況を作り出したのは、天音本人である。

そこで、天音の思考は停止してしまっていた。

この状況は魔法ではおそろくどうにもできない。いや、科学でもそれは同じ。

だから天音にとつて魔を捨てるといふ選択は、確かに間違っていないのかも知れない。

「けれどここまで来たら、わたしはもう魔を捨てられない」

「魔法使いらしい言葉ね。けれど、天音は違う。この子は兄を生き返らせればそれで良かったからね」

魔を捨てようとしていた理由も、これでわかった。

「この街がいい街だと思つたのは、魔法使いがいるし、天使もいる。魔を知ってしまった天音にとつては、いい場所だと思つたのよ」

「そうなのかな……」

「もういいじゃない？ 魔を捨てて、普通の人間として生活すれば。でも普通の学校じゃ、打ち解けられないと思うのよ。あんたみたいなのがいて、天使もいて、天音のような人間を受容できる学校じゃないとね」

「そ、それはそうかも……」

「だいたい、この子、いくつだと思つた？」

「え……」

それは雛子も知りたいことだった。

自分より幼く見えるのは確かだ。しかし、あれだけの魔の術を得るには、本来膨大な時間を要するはずだ。

自分でもかなり早く会得してきたという自信がある……しかし……。

「こ、高校生ぐらいかな」

負けたくないという気持ちも込めて、雛子はそう答えた。

「フフ、この子、まだ一四歳よ」

「う……!!」

自分よりも三つも年下……。

「本来ならさー、学校にでも通って、同性の友達とつるんで遊んだり、男の子にときめいたり幻滅したり……そういう年頃じゃない?」

「……………わたしもそんな学校生活はおくつてない」

「そりゃ魔法使いだからでしょ」

「そ、そうだけど……」

「ま、魔は捨てなくてもいいのかも知れないけど、とにかくあの村からいったん距離を置いて、人間らしい生活をさせたかったのよ。その点、この街は魔法使いたみたいな理解者もいるし、なにやら

不思議なメンツもいるようだから、天音にはびったりだと思っただけだ」

「なるほど……」

「天音の命を狙うなんて……どういう見なのかしらねえ……」

彩は長いため息をついた。

「!!」

不意に、雛子の携帯が鳴った。

「びっくりした……」

慌てて画面を見ると、光人からだった。

そっだ、あとで報告をすると言っただけだった。

『よかった、無事か。遅いから心配したぞ』

電話に出ると、不安そうな光人の声が聞こえてきた。

自分のことを心配してくれている存在がいることに、雛子は何故か安心感を憶えた。

「大丈夫。平気だから。もうすぐ戻る」

『夕飯は食べたのか?』

「うん、食べた」

『そうか。それじゃあ、気をつけて来いよ』

「わかってる」

『さつきより、声はだいぶ落ち着いてるようだな、安心したよ。じゃあな』

「うん……」

ふう、と自然と安堵のため息が出る。

「親から？ 早く帰ってこいつて？」

「違う、話題の天使から」

「へー」

「心配したらしい」

「愛されてるじゃない」

「わたしが、彼を見つけたから」

「フフフ、偉い自信ね」

「けれど、彼はわたしの魔の苦悩は理解しない……」

雛子はうつむいた。

そして寝ている天音に、何となく寄り添う。

「わたしは初めて、わたしと同じ苦悩を持つ人に出会えた」

それが天音。

自分より年下の、可愛くも尊敬すべき先達<sup>せんだ</sup>。

そんな二人を、彩は優しそうな目で見つめるのだった。

\* \* \*

天野家は三世帯住宅という大きな家である。

そこには五人の天使が住んでいる。

賢者達はこの家を『天使御殿』と呼んでいるのだが、光人達がそれを知るのは、もっと後のことである。

雛子はこの天使御殿にたどり着くと、皆を居間に集めた。

そして、鈴鳴屋のことで、自分たちが命を狙われたことについて、天使達に報告した。

「鈴鳴屋の仕組みは、だいたいもうあたしの組織で把握は終わったみたいよ」

開口一番、そう教えてくれたのはやすらだった。

「それに、今日からかなり強力な魔が入り込んでいるのもキャッチしてる」

それはおそらく彩のことであろうと、雛子は推理した。

あの妖狐は少なくとも二千年以上生きているらしいし、そうなれば相当な妖怪のはずだ。彼女自身、『神』と言っていたのも見逃せない。

「たぶん、その魔は無害だと思う」

雛子はそう返した。

「あたしじゃ勝てないって言われたんだけど……」

やすらは口をとがらせた。

「そんなにすごいのか……」

光人が驚く。

「うん、みたい。ウチの組織も、最初はかなり慌ててたわよ」

「やすらの組織でも、ケンカを売るべきではない相手……」

「そういうことになるわねー」

そんな存在にため口を聞いてしまった雛子は、少し背筋に寒さを感じた。

しかも彼女は自分や天音に酌までしてくれた。

雛子は少し恐怖すら覚えた。

「とにかく、やすらの組織は鈴鳴屋や天音を排除しようとはしていない？」

「今のところはねー。監視するところが増えて面倒は面倒みただけど」

「ふむ」

「やすらの組織じゃないとなると、いなきりようし稲置涼子か？」

光人が唇をかみしめて、つぶやく。

だがそれも雛子にとっては解せない話である。

「天音は魔を使う以上、絶対に悪魔と契約しているはず。となれば、かの稲置が天音をつぶすよ

うなことはないとおもうけど」

そう、ネクロマンサーである天音の魔の力は、悪魔寄りであるはずなのだ。

「あんたもでしょ」

そこへすかさず、やすらがびしつと雛子の事を指さした。

「う……」

雛子もまた、魔を扱う以上、悪魔の力を借りることはあった。

「俺もあまり感心できないな」

光人もじつと雛子を見つめる。

「あなたたち天使に、わたしの魔の苦悩は解らない！」

一瞬でも瞑想すれば、一降りでも腕を動かせば、魔が扱えてしまう天使に、自分の何が解るといえるのか。こちとら触媒を用意し、呪文を用意し、我が身を削る思いで成し遂げなければならぬというのに。人間というちっぽけな生き物が、魔を扱うと言うことがどれだけ大変なことか！

「まあ、今は雛子のことを話すために集まってるわけじゃない」

「それはそうだけど……」

「しかし、となると誰が鈴鳴屋を狙う？」

光人は一人一人に視線を送った。

「想像がつきませんわ……」

瑠璃火も困ったように、首をかしげた。

「うーん、無理矢理感はあるけど……」

そこへ、水翼が思い出したように話し出す。

「最近、市長の機嫌が良くないな」

「あー」

すると瑠璃火と水帆がハモった。

「あの市長は気分屋じゃないか。機嫌なんてコロコロ変わるから、判断の足しにもならない」  
光人は思い出したくもないといった様子だった。過去に何かあったのだろうか……。

「ですが、この街では私たちの長ですし……」

瑠璃火も少し困ったような表情をする。

「んあ？ ホラントより橘の方が上じゃないのか？」

水翼が首をかしげる。

「私は橘姓ですけど、神事を司ってきた橘家は支流なんですよ」

「なーんだ、そうだったのか」

「本家は別なんです」

「やーこしいのう」

水翼は口をへの字に曲げると、テレビのリモコンに手を伸ばし、テレビを見始めてしまう。

「どうやらもうこの会議には飽きたらしい。」

雛子はそれに少し腹を立てたが、しかし、これ以上、解りそうなこともなかった。水翼の行動も仕方のないことだった。

「光人は……」

「ん？」

最後に天使の力を借りられないか、雛子は光人に聞いてみることにした。

「この街で何が起きているのか、識<sup>し</sup>る気はない？」

天使ともなれば、人の心も解れば、世界中で起きていることも解るはずである。しかしそれができたとしても、天使自身に知る気がなければ、意味がない。

「俺に識れと」

「イヤじゃなければ……」

「じゃあ今俺が感じていることを教えるよ」

「え？」

あつさりヒントをくれるという光人の答えに、雛子は驚いた。

「あくまでもこれは俺の勘でしかないんだが」

とはいえ、天使は世界線の向かうところを感知できるはずだ。決して侮れない。  
「雛子の言うとおり、原因になっているのはどうやら『魔』みたいなんだ」

「うん」

「で、次に来るファクターは『人間』なんだよ、雛子」

「人間……?」

「雛子、おまえ何度も俺たちにこぼしてるだろ?」

「何を?」

「魔を自由に扱える天使に、自分の苦しみの何が解るのかってさ」

「う、うん……」

「つまり、これは人間の問題なのさ」

「人間の……問題……」

「少なくとも俺の魂は、そう読んでいる。俺たち天使が出る幕じゃないみたいなんだ」

「そうなのか……」

「そして当然、鈴鳴屋に来た強力な魔とか言うのも、出る幕だとは思っていないはずだ」

あの妖狐も、出る幕じゃない……。

「だからやすらの組織も動いてないんだと思う。そして鈴鳴屋に来た魔も、動かないと俺は思う」

「むう……」

「これはたぶん、人間だけで解決すべきことなんだろうな」

「人間だけで……と言うことは天音を襲ったのも人間」

「だから、俺が介入していいものか、悩んでいるんだ」

「でも天音を！ 天音だけは護って欲しい!!」

不意に雛子は声を荒げて光人に詰め寄った。

「神宮司さん……」

「あの子は、わたしが初めて会った、魔を使う人間。わたしと同じ孤独にずっと絶えてきた……あの子がもし、もし、今のままで死ぬようなことがあったら……!」

いつも冷静沈着な雛子が、ここまで感情的に声を荒らげるのを見たのは、ひよつとしたら初めてかもしれないと光人は思った。

「天音はすごい子なんだ。わたしなんか足許にも及ばない。なのに、ずっと孤独だった。これから天音は幸せをつかまなくちゃいけない子なんだよ。孤独から解放されなくちゃ! だから、あの子も光人の力で守って欲しい!!」

「雛子がそこまで入れ込むのは珍しいな」

「それくらい、すごい子なんだ。あの子は人類の宝だよ!」

「雛子がそこまで言うのだから、相当な魔の使い手なんだな」

「うん!」

雛子はまるで自分自身が褒められたかのように、無邪気な笑顔を返した。そんな笑顔も、天使達は初めて見るかも知れなかった。

「そこまで言うのなら、その子に加護を与えようか……」

と言ったところで、光人の顔が曇った。

「どうしたの？」

「どうやら、彼女には彼女の加護があるみたいだな」

「あ……」

それはおそらく、あの彩という妖狐の加護なのだろう。

「彼女にかかっている加護は、俺の加護を受け付けない……」

光人は悲しそうに目を閉じた。

当たり前である。妖狐の加護となれば、その力が天使の聖なる力と調和するわけではない。

「……………」

雛子は戸惑った。

妖狐の加護を信じないわけではない。おそらく、妖狐の加護もすごいのであるがしかし、光人の言った「この問題は人間が解決すべきこと」という言葉が雛子の心に引かかった。同じ結論を妖狐も持っていたとしたら、妖狐は天音を守らないんじゃないだろうか？

「どうしてもできない？」

「どうか……無理矢理、その子を俺の加護に入れることはできるんだろうか……」

光人はしばし考えていた。というよりは、天音の加護の源を探っていた。

「難しいな、俺がちよっかいを出して、果たしてその子の加護者が納得するか……」

「わたしが話してくる！」

雛子はそう強く答えた。

\* \* \*

翌日、雛子は鈴鳴屋が開店する少し前に、鈴鳴屋を訪れた。

当然、学校はサボりである。

しかし、そこに天音の姿はなかった。

「あ？ 天音なら、彩先生と朝のうちに帰ったわよ」

凜は商品の入った段ボールを暴きながら、めんどくさそうに答える。

店内にはあの猫たち以外に、三人の人間がいた。

それは話せば受け答えもするし、表情も変わるがしかし、雛子は作り物だとすぐに見破った。

彩が天音の代わりに置いていった、式神である。

「なるほど、これが式神というものか……」

良くてできていると、雛子は感心した。

「それで、いつ戻ってくるのかは言ってなかった？」

「ん、二、三日とは言ってたわよ。だいたい天音に来てもらわないと、あたしだって困るし」

「式神では足りない？」

「彩先生をつくる式神は優秀だけど、やっぱり融通が利かないのよね」

「ふむ……」

ロボットみたいなものだろうか……。

「じゃあ、わたしが鈴鳴屋を手伝おう！」

雛子は自分の胸をたたいて、そう宣言した。

「まー、緊急事態だし、しようがないわねえ……」

燐は渋々といった表情をするが、内心はじつは喜んでいた。

「にやあ」

化け猫に恩を売ったところで、何の見返りもないことをこのとき、雛子はイヤと言うほど思い知らされるのだった。

「はい、これ」

「これは？」

「ウチの倉庫の見取り図。天音のために用意したものなんだけどー」

「？」

「ドコに何があるのか今すぐ倉庫に行って、全部覚えてきて」

「は!？」

「ウチの商品はすぐに棚からなくなっちゃうんだから、倉庫からすぐに出せなくちゃダメなのよ。取りに行く時間は必ず三分以内」

「ううう……!」

「はい、駆け足!」

「わ、わかった……!」

雛子にとつて、魔法の修行よりも過酷な地獄の一日の始まりだった。

凜はとことん雛子を使い倒す気で、万引きの恨みもあつてか最も過酷な労働を雛子に強<sup>し</sup>いた。

「遅い! 恋愛成就のお札とゴキブリ除<sup>よ</sup>けのお札、三分以内にとつてきて」

「は、はい!」

「この箱の中のぬいぐるみ、全部棚に並べてきて」

「は」

「そんな蚊のなくような声で呼び込みしてどうすんのよ! もっとハキハキと笑顔で喋りなさいよ」

「はい」

「客の列が乱れてきてるから、サポートして!」

「は、はい……」

凜に怒鳴られっぱなしの一日であった。

「あ、いたいた！」

そこへ聞き覚えのある声が後ろから聞こえてきた。

「本当に鈴鳴屋で売り子をしていたのですね……」

やすらに瑠璃火だった。

「学校で話題になっちゃってるわよう、学校サボって店のバイトしてるって」

「しまった……！」

どうやら雛子はそんなことさえも頭が回っていなかったらしい。

「聖天翔学園の生徒としてあるまじき過ぎる行為だと思っけど〜」

やすらがに意地悪く笑う。

聖天翔学園の生徒に一番あるまじきことばかりしているくせに!! と、雛子は心の中で叫んだが、今は圧倒的に分が悪い。

「きよ、今日だけだから」

雛子は慌てて取り繕った。

「明日からは、学校が終わってから手伝う」

「明日もやるんだ？」

「仕事熱心ですね」

「こらー！ 何客と無駄話してんのよ！ こっち手伝って!!」

「は、はいー」

雛子は挨拶もそこそこに、呼ばれた方に駆けていく。

「神宮司が他人にこき使われてるところなんて、初めて見るかも」

クスクスとやすらは笑いを隠せなかった。

「そうですね、命令されるのが嫌いな方ですのに」

瑠璃火も微笑ましいそうに雛子の後ろ姿を見送った。

「光人の言うことぐらいじゃない？ 神宮司が聞くのって」

「そうですね」

「アレか」

「はい？」

「例の狙われてる子が店先に立てないから、神宮司が代わりにがんばってるのね」

やすらは店内をざっと見渡す。

たしかにあの桃色の髪のお店員がいない。

「ですね」

「光人も心配していたけど、人間が魔にのめり込むことが果たしていいことなのか……それはあた

しも悩むことがあるわ」

「朝日奈さん……………」

「あたしの組織にも、魔を扱う人間はたくさんいるけれど……人は万物を見通せないし、未来を読むことも出来ない。そんな中で、魔を使いこなさなければならぬ……」

「そこにはきつと、私たちには計り知れない努力と犠牲があるのでしょね」

「そうね」

人にはそれに見合った生き方が他にあるのかもと言おうとして、やすらは言葉を止めた。それを言ってしまうと、雛子の全てを否定してしまうと思うたからだった。

「けれど、人は自分で自分の生き方を選択できるから」

「そうですね」

瑠璃火の笑みは、少し人を羨んでいるようだった。

\* \* \*

ひたひたと足袋が床板の上を歩く音で天音は目を覚ました。

薄まぶしい光が視界の中に溶け込むように入ってきた。

最初は何色か解らなかつたが、ようやくそれが夕日の色であることに気付く。

「おはよう」

ひたひたという足音は自分の枕元でとまり、そして木訥な声<sup>ぼくとつ</sup>が上から降ってくるのだった。

「紗雪……」

真つ白な着物をオレンジに染<sup>そ</sup>めて、雪ん子の紗雪がじつと天音の顔をのぞき込んでいた。

「わたし……ねていたの？」

朝に彩と村に戻ってきてからの記憶がすっかり抜け落ちていた。

「よく寝ていた。鈴鳴屋の手伝いは、大変だった？」

「べつに疲れてるなんて思っではいなかったのだけれど……」

「でも、ちょうどよかった」

「？」

紗雪は温かいお茶を、スイと天音に差し出した。

「そろそろ起こそうと思っていた」

「ありがとう」

天音はお茶を受け取ると、ほっと一息つく。

「やっぱり疲れていたのかも……」

そしてううくと伸びをした。

実質、鈴鳴屋を手伝ったのは四日程度。疲れも何も……とも思うのだが、命を狙われたこともあり、緊張して疲れに気付いていなかったのかも知れない。

「自分の部屋で寝ないの？」

紗雪がお代わりのお茶を注ぎながら、そんなことを言う。

考えてもみれば、兄たちの住む別荘があり、そこには自分の部屋があり、そしてフカフカのベッドもある。

「ん……なんとなく……」

別荘に帰ったら、兄と夕奈のラブラブな空気に当てられる。

今はそこに身を投じる気になれなかった。

命を狙われたし、見知らぬ土地にいたこともあつて緊張していたから、大好きな兄に甘えたいのは確かだ。それにおねだりすれば、兄は自分のことを抱いてくれるだろう。けれど、そこには夕奈もいる。自分だけを抱いてくれることはないし、今の精神状態で、兄と夕奈のセックスを見せられる方がよっぽど苦痛だった。

とたんに、自分の居場所がこの村にはないのかもしれないという気にかられた。

「あら、起きたの？」

彩が二人の会話を耳にしたのか、部屋に入ってきた。

「スカートがしわだらけじゃない」

天音は着替えもせずに寝てしまったようだ。ヒモはほどけ、襟もくしゃくしゃだ。

「家に戻るのも面倒で……」

天音は恥ずかしそうにうつむいた。

とはいえこの服はお気に入りの一着でもあった。このままにしておく訳にはいかない。

「まー、そうだろうと思って着替えはとって来たわよ」

ぼすつと天音の着替え一式を彩は天音の前に投げた。

「ありがとうございます」

天音はそれを何となく受け取ると、どこで着替えようかとキョロキョロした。

「新しいのを着るよりも先に、お風呂入った方がいいんじゃない？」

「あ、そうですね……」

「沸いてるわよ」

「はい……ありがとうございます」

天音はゆつくりとした足取りで、紗雪と彩の前を通り過ぎて、部屋を出て行った。

「彩先生？」

「ん？」

「天音に、何かあった？」

「そうねえ……」

なかなか説明が面倒くさいと、彩は頭をボリボリかく。

「陸をさけてる？」

「ん、どうなのかしらねえ……」

「先生、答えになってない。鈴鳴屋で、何かあったの？」

「いろいろあったわねえ。ま、今はそつとしといてあげて」

「そう……」

紗雪はコクと頷くと、空になった湯飲みを片した。

天音は軽くお湯で身体を流すと、湯船につかってぼーっとしていた。頭の中では汐碕市でのことを思い出す。結局なにが起きて、どうして村に戻ってきたのか、天音はイマイチ混乱していたのだ。つた。

鈴鳴屋を手伝うのは、疲れるけど楽しかった。

神宮司雛子に会えたことは、驚きと共に、嬉しかった。が、しかし、自分がネクロマンサーであることを知られてしまったことが不安だった。神宮司雛子に差別されたり、嫌われたりしないだろうかという気持ちがある。

そして……命を狙われた。

それが疲れとともに大きなショックだった。もしそれが、ネクロマンサー故のことであつたらと思うと、ガタガタと身体が震えるのだ。

すべての証拠は消してあるはずだった。

自分がネクロマンサーとしてしてきたことは、すべて闇に葬られているはずである。

それよりも何よりも、それによって他人を不幸にしたことはない……はずだった。

あくまでも、「はず」ではあるのだが……。

「疲れがとれない?」

「きゃ……!」

いつの間にか、彩がそばにいた。

「彩先生……」

「いろいろな気になることがあるよね。ほら、こつちにいらっしやいな。身体、洗ってあげるわよ」

「……そんな、彩先生にそんなことまでしていただくなんて」

「いいのよ、あたしが洗いたいわって言うてるんだから」

「は、はい」

天音は立ち上がると、恐縮しながらも彩の前に座った。

「……………」

彩が天音の身体をじっくりと見るのは、実はこれが初めてだった。

薄幸そうな白い肌は、男子の魅力でもあるだろう。そしてそれを抱ける陸は、幸せ者である。

胸の発達は遅めだが、バランスはとても良い。

長い髪も柔らかくて、素直に真っ直ぐ垂れ下がる。

非の打ち所のない美少女の姿が、そこにはあった。

しかし、彩は目を覆いたくなる気持ちでいっぱいだった。

これがネクロマンサーの苦しみか……。

彩はそう思いながらも、あかすりに石けんを塗り込んでいく。

そして、そっと天音の身体を洗ってゆく。それはまるで、ガラス細工でも洗っているかのような……そんな感じだった。

天音の身体は、彩から見ればつきはぎだらけに見えるのである。魔の力で修復したあとが、全身に残っているのだ。

おそらく天音自身のオリジナルな肉体は半分もないだろう。少しでも力を入れれば、今にも崩壊してバラバラになってしまいそうなくらい、天音の身体はつきはぎにつきはぎを重ねているのだ。

「ここまでとは、さすがにあたしも知らなかつたわ……」

彩は押し殺すような声で、つぶやいた。

「え……?」

「あたしが最初からついていれば……」

「な、何の話ですか、彩先生?」

「あたしには見えてしまうのよ、天音」

「なにかみえるのですか?」

「天音の身体に残る、魔の痕跡がね……」

「あ……」

「事故のことは、あの若造から聞いてはいたけれど……助かったと言っても、そもそも五体満足だったワケじゃないのね」

左腕を洗う。これは天音の身体ではない。

そしてこの細くてキレイな左足も。

おそらく左半身をつぶされたのであろう。

「わかつて……しまうのですね」

「けど、事故のだけじゃないわね。そのあとたくさん傷があるわ、これはどうしてなの？」

「はい……ネクロマンサーは命を扱う術……その術を手に入れるためには、命はいくつあっても足りません。実際に命を扱い、そしてそのためには多くの命が必要なのです」

「……そうね」

そこは彩も踏み込んではいないことだった。

天音が戻ってきて、陸と一緒にあって、それで良しとしたのである。それ以上のことは追求すまいと、彩はそう決めていたのだ。

「けれどわたしには人を殺す勇氣も、またそれを行う冷徹さもありませんでしたから……」

ふう、と天音はため息をついた。

「まさか!」

彩は天音の両腕をとって、左右に開いた。泡にまみれながらも、天音の胸や腹が露わになる。

「そのまさかです、彩先生」

胸から腹にかけての治療痕が、一番ひどかった。

もちそんなそれは、普通の人間には見えない。魔力や妖力を感じる者だけが見ることができる、妖しくも痛々しい跡。

「天音……あんたって子は……」

「はい、自分の身体で、試したんです」

自分の内臓を取り出し、肋骨を割き、身体の隅の隅までつぶさに調べ上げた。

何の組織がどうつながり、何の役目があり、そしてそこに術がどのように作用するのか。それを繰り返し、繰り返し、途方もない時間をかけて積み重ねていったのである。

「そのために決して欠かせなかつた術が、エンチャント……付与だったので」

「時間を含めて魔を制御したかつたのね」

「はい、自分の心臓を取り出した上で、術を使わなければなりませんでしたし、そもそも自分の身体を裂いているときは、ほとんど意識が保てませんから」

あらかじめ命の維持に必要な魔法や、実験結果を記す魔法をかけ、さらに一定時間後に怪我を癒す魔法をかけておき、自分の身体をまさに解剖するかのようによく。これらはすべて時間通りに行われ、時間が来ると一つ一つ治癒され、最終的に元の身体に戻る。

そうして得られた結果を、意識を取り戻して魔法で収集する。

それは魔による命の綱渡りだった。

「画期的だったのは、マジックジャー Magic Jar という呪文を手に入れてからでした。あの呪文によって精神を肉体から分離させ、エンチャントの呪文により、観察しながら自分の身体をオペレーションでできました」

「うえ……」

「すごく、すごく奇妙な体験です。自分の身体を、外から解剖する。不思議な体験でした。思い出したくもない光景ですが、ダメですね……もう絶対に忘れません」

「でも、そこに至るまでは自分の身体では試せないでしょ？」

「はい、病院という所はそれは便利な場所でした」

「死体で試したのね」

「はい。最初のウチは、元に戻せなくて……ご迷惑をおかけしたこともありました。けれど、元に戻せるようになってからは……」

唯一、天音が他人に迷惑をかけたのが、この死体いじりであった。

「天音……」

そこまで強い思いを兄に対して持っていたのかと思うと、彩は恐怖すら感じると同時に、夕奈というもう一つの魂を生み出してしまっただとどうであったのだと言うことに気付いた。

そう、天音の兄を思う強い気持ちこそが、逆に天音自身を孤独へと導いてしまったのだ。

「天音？」

「はい？」

「あなたはね……もう取り返しもつかないところまで来てしまってるわ」

「え？ な、なんのことですか？」

「もう天音は、あたしと同じ世界に、片足どころか、すっかり入ってしまったのね」

「彩先生の世界……ですか？」

「もつと早く気付けば良かった……」

彩は天音を抱きしめた。

「もう、ここまで来たら引き返せない……」

そして彩は悟った。どうして、天音の命が狙われるのか。そう、それは汐碕市から逃れてくれ  
ばよいという問題ではないのだ。

「な、なんのことですか、彩先生……く、苦しいです」

しかし彩はしばらく動かずに、ずっと天音のことを抱きしめていた。

\* \* \*

事の真相が直接彩に伝わったのは、天音を風呂から出してすぐのことだった。

自分の結界内に入りたいという申し出が、何者からかあったからだ。だった。

彩は神社から人払いをした。天音は兄のいる別荘に帰るのを渋ったが、彩の命令に近い言葉で、渋々と神社を後にした。

神社に案内されたのは、黒に統一された服に身を包んだ、三〇歳ほどの長身の男だった。かの汐碇市長も掲げる十字架のシンボルをつけていた。

ああ、終わった……と、彩はこの時思った。それは絶望にも近い気持ちだった。

しかし考えても見れば、彩はこの時点で、すべての覚悟ができてしまったと言えるかも知れない。「ご無理を通していただき、感謝します」

男は深々と礼をした。その仕草は洗練されており、隙もなく、そして嫌味もなかった。まさに法の番人にふさわしい、厳かな態度であった。

「こんな田舎にまでわざわざ法の者が来るとは、何の用？」

彩は平静を保ちつつも、次に来る言葉を何度も心の中でシミュレーションした。もう用事なんて解っているし、自分ではどうしようもないことも解っている。

「私は Rudolf Hangstein と申します。ある一つの使命を帯びて、ここに参りました」

「使命………」

「藤原得子様、あなた様が加護をなさっている人間が一人、人間の壁を越え、賢者の領域へと足を踏み入れられてしまいました」

「今は、彩と呼んで欲しいわ。その名前はもう何百年も前に捨てたものだから」

「それは失礼しました」

「そう……やはり、そういうことだったのね」

「左様です。悲しいかな、その命を絶つ役目を、今回は法が負っておりませう」

「絶対に見逃せない？」

「我々が既に動き出したと言うことは、見逃すことは不可能と言えませう」

「そうね……すべての賢者が、天音の存在を知ったことになるものね」

「彼女の成長を止めることはできなかったのですか、彩様」

「フフフ……無理だったでしょうね」

兄を生き返らせるという思い。自分を何度も切り裂いてまで到達させたかった思い。それを止めるなど、無理だったであろう。

それにそもそも、天音が彩の加護に入ったのは、それらの術を会得した後である。

「わかったわ、天音は汐碕市に戻すわ。ここで殺すのだけはやめて。ここは、今はとても平和だから……」

それくらいしか、彩は答えることがなかった。

「かしこまりました」

「そうね、今夜は休んでもらって、明日にでも返すわ」

「では、すべてが終わりましたら、また報告に参ります」

男は礼をすると、この場から立ち去ろうとした。

「待つて、亡骸は……この村に葬ることはできるのかしら？」

「勿論です。彩様の民ですから、魂もまずは彩様が受け取ることになると思います」

「そう……安心したわ」

せめてその魂だけは、自分の手で鎮めたいと、彩は思った。

「失礼いたします」

男はもう一度礼をすると、去っていった。

しばらく彩はポーツとしていた。

彩にとつて、これは失態だった。やはり天音がどうやって陸を生き返らせるだけの力を身につけ

たのか、追求すべきだったのだ。

そして……。

「あの汐碇市に鈴鳴屋を開いたのが、よくなかったのね」

このまま彩の土地から出ず、大人しくしていれば、誰も気付かずひっそりと暮らして行けたのだろう。鈴鳴屋の開店は天音の力がこの世界に知れ渡るきっかけを作ってしまった。

あの神宮司雛子がいともあっさり嗅ぎつけたように。

「あたしも、ほんつとバカねえ……。バカ！ バカ!! バカ!!!」

彩はいつの間にか、目に涙を浮かべていた。

天音をあの暗殺者から守ることは、彩にとって決して難しいことではない。

しかし、それはこの世界の均衡を崩す。

そればかりではない、この村もどうなるかわからない。

そしてなによりも、彩自身がどうなるかも解らない。また千年前のように、悪の限りを尽くす彩に戻るといふのなら、その選択もありかも知れないが。

「紗雪！」

「はい」

「聞いてたのね」

「人払い、だから」

「は？」

「私は、人じゃない。雪ん子……だから、ここにいてもいい」

「変なところでとんちきかせんな！」

「だいたい、この村は妖怪の村。人間は天音とその兄だけである。」

「ごめんささい」

「まあいいわ、天音を呼んできて」

「彩先生」

「何？」

「天音は……どうなるの？」

「死ぬのよ」

彩は躊躇わずに、そう答えた。

「どうして？」

「賢者になつたから」

「賢者になると、どうして死ぬの？」

「賢者は強すぎるからよ」

「強い……？」

「人間の力を遙かに超えた者はね、紗雪、それだけで恐ろしい存在なのよ。だから、たくさんいたらこの世界がおかしくなっちゃうでしょ？」

「人間じゃなければいいの？」

「そうね……これは人間だけの取り決めだからね」

「なんかおかしな話」

「そう？ 数少ない人間の良心なのよ？」

「良心？」

「この自然を汚し、あたしたち妖怪たちを追いやった人間が、強い人間の数は制限しましょうって

言ってくれてるんだから」

「ふむ、なんとなく、わかった」

「わかったら、さっさと天音を呼んできてちょうだい」

「はい、彩先生」

わずかな望みは、天音にあの暗殺者を倒してもらおうこと……だが、今の天音にそれが出来そうにもないことは、彩はなんとなく察していた。